様式 C-7-2

# 自己評価報告書

平成　23 年　5 月　10 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：若手研究（B）
研究期間：　2008～2011
課題番号：　20730337
研究課題名（和文）　日本における近年の性同一性障害と性の多様化
研究課題名（英文）　Gender Identity Disorder and gender diversity in recent years in Japan

研究代表者 鶴田　幸恵（TSURUTA SACHIE）
奈良女子大学・大学院人間文化研究科・助教

研究者番号：00457128

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：性同一性障害、医療化、性の多様化

１．研究計画の概要

申請者の研究は、女から男へ、男から女へと性別を越境するトランスジェンダーおよび、そのあり方が医療化された性同一性障害である人びとが、日本社会で生活するなかで抱えている問題を取り扱うものであり、そこから現代日本における性のあり方を明らかにするものである。今回申請した研究では、1997 年から行っているトランスジェンダー・性同一性障害コミュニティでのフィールドワークの延長線上にあり、これから展開が期待される問題

（1）性同一性障害の診断場面における性別の取り扱い

（2）女／男という二元的ではない、より多様化した性としての生き方

（3）性を越境していることを明らかにしながらの就労問題

を継続的に調査し、発表していく。

２．研究の進捗状況

(1)協力病院でカウンセリング録音・録画データ収集を行い、65 ケースを収集し、トランスクライブを終了した。また、精神科医・臨床心理士 10 名にインンタビューを行い、トランスクライブを終了した。

(2)FtM（Female to Male）、FtX（Female to X）の当事者が参加するグループで排表調査を行い、96 票配布をしたうち、60 票を回収することができた。そのうちの 19 名にインタビューの約束を取り付け、14 名にインタビューをすることができた。これも、トランスクライブはすべて完了している。

(3)同じ職場で、性別を男から女に変更した 2 名の職場の参与観察、職場の同僚、上司など複数名、また、本人にインタビューを行った。トランスクライブも終了した。

(4)また、継続的に参加している自助グループの会合に参加し、コミュニティの状況を把握し続ける。また、文化人類学や心理学を含むトランスジェンダー・性同一性障害の研究者と意見交換を行なった。

(5)さらに方法論として、エスノメソドロジーの研究会、医療社会学の研究会に継続的に参加し、意見を交換した。

３．現在までの達成度

①当初の計画以上に親展している。

調査は、当初の計画以上に進展している。その理由は、こまめなフィールドワークに力を注いだためである。

研究結果の発表は、やや遅れている。しかし、これは当初の計画以上の調査データが得られたため、分析に時間がかかっているからであり、研究発表を継続的に行ってはいない、ということではない。

４．今後の研究の推進方策

(1)データを精密に分析する会話分析の研究会において、データセッションをしてもらい、論文の執筆を進める。執筆段階で調査データが不足しているとわかったら、調査を継続し、データを取得する。また約束をとることができた精神科医 1 名と臨床心理士 1 名、カウンセリングも行う形成外科医 1 名にインタビューを行う。それによって、医療者の方法論に関する論文の執筆を進める。

(2)データを分析して、医療化と生の多様化と関連付けた論文の執筆を進める。また、FtX というような、ある意味「中途半端」な外見に関する論文について、掲載の予定がある。

(3)分析し、論文の執筆を進める。可能であれば、めどをつけているもう１名の職場坊門および上司・同僚・本人へのインタビューを追加する。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

①鶴田幸恵「性別カテゴリーの特異性が現れる「『視界の秩序』――『性同一性障害』の人びとへのインタビューデータから」『女性学』16 号　査読有　2009　pp.85-100

②鶴田幸恵「正当な当事者とは誰か――『性同一性障害』であるための基準」『社会学評論』査読有　233 号　2008　pp.133-150

〔学会発表〕（計　4　件）

①鶴田幸恵,「関東の精神科医の診断をめぐる方法論――性同一性障害の当事者と制度の間に立つ人びとの考え方」『シンポジウム 社会制度から／への介入――過去、現在、未来』第 3 回クイア学会大会 2010 年 11 月 20 日, 於:中京大学.

②鶴田幸恵,「相互行為秩序における可視性をめぐる知見の使い勝手――性同一性障害をめぐる現象の分析から」テーマセッション「ゴフマンの方法論を再点検する――ゴフマンは『使える』のか」第 61 回関西社会学会大会　2010 年 5 月 29 日　於：名古屋市立大学

③鶴田幸恵 「自分史をやる――性同一性障害のカウンセリング場面の録音／録画データの分析」第 82 回日本社会学会（一般研究報告 1 性･ジェンダー2） 2009 年 10 月 11 日, 於:立教大学.

④鶴田幸恵,「『視界の秩序』における性別カテゴリー――『性同一性障害』である人びとへのインタビュー・データから」第 81 回日本社会学会大会（一般研究報告 1　セクシュアリティの社会学（性・ジェンダー2））2008 年 11 月 23 日，於：東北大学.

〔図書〕（計　5　件）

①鶴田幸恵「性同一性障害のカウンセリングの現実について――ここ十数年の調査から」明石書店　好井裕明（編著）『差別と排除の［いま］第 6 巻　セクシュアリティの多様性と排除』　2010　pp. 125-160

②鶴田幸恵「いかにして『性同一性障害として生い立ち』を持つことになるのか――実際のカウンセリングの録音・録画における『自分史をやる活動』に焦点を当てて」北大路書房　宮内洋・好井裕明（編著）『＜当事者＞をめぐる社会学――調査での出会いを通して』　2010　pp.21-40

③鶴田幸恵『性同一性障害のエスノグラフィ――性現象の社会学』　ハーベスト社 2009　265 ページ

④鶴田幸恵「『金八』放送以降の知識の広まりは何をもたらしたか――FtM カテゴリー使用の論理」御茶の水書房　石田仁（編著）『性同一性障害――ジェンダー・身体・特例法』2008 pp.161-182

⑤鶴田幸恵「性同一性障害を抱える人びとの見解（1）――インタビューから明らかにされた特例法への評価」御茶ノ水書房　石田仁（編著）『性同一性障害――ジェンダー・身体・特例法』　2008　pp.105-131